

学年	指導方法の課題分析	具体的な授業改善案	補充・発展指導計画
1年	・自分の考えや思いを、言葉や文章で表現することが難しいため、表現技能の指導や、安心して表現できる環境整備をする。 ・話の内容を正しく聞き取ることが難しいため、基本的な聞く態度の徹底が必要である。 ・助詞「は」「へ」「を」や、促音、拗音を正しく書くことが難しいため、言葉や文章を書く活動を、十分に確保する必要がある。	・基本文型を示し、文章を書く技能を身に付けさせたり、語彙を増やしたりして、表現力を高める。 ・話を聞く基本姿勢を示す。正しい姿勢で座り、相手の目を見て、心も相手に向けて聞くことを、繰り返し指導する。 ・生活科や図工科等、他教科でも文章を書く活動を増やし、表記の仕方を実践から身に付けさせる。推敲の習慣も付けさせる。	・各教科や日常生活で感じたこと、考えたこと、分かったことなどを文章に書いて振り返る活動を増やす。 ・自分の考えや思いを相手に伝える場面を確保し、表現力や語彙力を養う。 ・図書室指導の際に、様々な分野の本に触れさせ、読書への興味・関心を高めると共に、語彙力を増やす。 ・音読の宿題を毎日出し、家庭と連携して言葉に触れる機会を増やす。
2年	・相手の話を集中して聞き、話し手の内容を正しく聞き取る力を付けるために、授業の中で、少人数で話し合う活動を積極的に取り入れる必要がある。 ・文章を書く力を高めるために、身近なことや経験したことを報告したり、観察したことを記録したりするなど、自分の思いや考えを書く活動を多く取り入れていく必要がある。 ・新出漢字をしっかりと定着させていく。	・個人で考えたことをペアやグループで交流し、それを全体へと広げていく学習を行う。自分の考えを交流し合うことの楽しさを味わわせるとともに、質問や感想を伝え合う活動を多く取り入れる。 ・文章を書く活動を増やし、「はをへ」や文のきまり、改行・かぎ括弧などの文章表現の仕方を実践的に身に付けるように繰り返し正しく書けるようにさせる。	・スピーチを日常的に取り入れたり、友達の意見に対して質問や感想を伝える時間を確保したりして授業にて話をしたり聞いたりする時間を増やす。 ・文章を書く機会を増やし、自信をもって文章を書く力・読み直しをして推考する力をつける。 ・漢字の学習に毎日取り組ませる。宿題でも漢字を出し、家庭学習との連携を図る。
3年	・文章を書くことに課題が見られるため、「書く」活動の際は、書き方の手本やどのような言葉を選んで書くのかを示すなど、より丁寧な支援を行い、作文への抵抗感を減らしていく。 ・事柄の順序を意識させた作文指導をしていく必要がある。 ・新出漢字をしっかりと定着させていく。 ・話を聞きとることに課題があるため、話の聞き方や聞いた話のまとめ方について指導する必要がある。	・「書く」活動の際は、書き方の手本やどのような言葉を選んで書くのかを示すなど、より丁寧な支援を行い、作文への抵抗感を減らしていく。 ・ICTを活用することで、何度も下書きができるようにし、書き直す手間を省き、作文を書く抵抗感を減らす。 ・語彙を増やすために、新出漢字を使った熟語を集め、普段の学習から意識的に漢字を使うように指導していく。 ・「話す・聞く」の学習では、相手の話に付け足しをしたり、意見を述べたりする活動を通して、相手の話をきちんと聞く姿勢を身に付けさせる。	・書く活動では、ICTを活用してお互いの文章を評価し合うことで、もっと読んでほしいという学びに向かう力を養いたい。 ・相手に分かりやすく伝える力や聞く力を身に付けさせるために、ペアやグループでの話し合う活動を取り入れていく。
4年	・話を聞き取ることによって課題が見られるため、授業の中でメモを取りながら話を聞く活動を積極的に取り入れる必要がある。 ・言葉の学習で、主語と述語の関係について理解できていないので、主語と述語を意識させて文を書く学習を行う必要がある。 ・文章を書くことに課題が見られるため、自分の思いや考えを書く活動を多く取り入れ、書くことへの抵抗感をなくしていく必要がある。 ・新出漢字をしっかりと定着させていく必要がある。	・自分で考えたことをペアで交流し、それを全体へと広げる学習を行う。自分の考えを交流し合うことの楽しさを味わわせるとともに、友達の考えに触れる活動を多く取り入れる。 ・ノートやICT機器で文章を書く活動を増やし、それをお互いに交流させることを通してたくさんの文章に触れさせる。 ・語彙を増やせるように新出漢字の学習の際にさまざまな言葉を集めたり、熟語を作ったりさせる。	・朝の会のスピーチ活動や、帰りの会でのよかったさんの発表など自分の考えを伝える活動や、友達の考えを聞く活動を増やす。 ・国語科だけでなく、算数科や体育科での振り返りなど各教科でも「書く」活動を増やし、書くことに慣れさせる。 ・漢字と音読の学習に毎日取り組ませる。家庭学習とも連携させ、言葉の活動を充実させる。

5年	・文章を書くことに課題がみられるため、「書く」活動の際は、文章の書き方を指導し、文章を書く際に必要な文脈やさまざまな言葉を知ることができるようにする必要がある。 ・自分の考えをもって、その考えと事実や根拠を取り入れて文章を作るなど、文章の構成や自分の意見を文に表す活動を取り入れていく必要がある。 ・知識・技能の面について、「漢字を読む」に関して課題が見られるため、新出漢字の定着や既習漢字の復習を行う必要がある。 ・「言葉の学習」の修飾語に関しての理解不足があるようなので、意識させながら書く活動につなげる。	・自分の考えをノートにまとめたり、言語化したりできる場を設け、それに対する評価や交流を通して、自分の文章のふりかえりを行っていく活動を取り入れる。 ・文章の書き方や構成について、すすんで学ぶことができるように段階や少しずつ指導をすることで、苦手意識をなくしながら文章を書く技能や思考を伸ばす。 ・新出漢字の学習の際には、既習の漢字の復習を一緒にしたり、熟語や言葉の確認をして語彙を増やす。	・国語の学習だけでなく、他教科でも文章をまとめたり、構成を考えながら書いたりする活動を増やす。 ・自分の考えをもつことができるようにクラス会議などを用いて、意見や思いを表出できるような活動を取り入れる。 ・児童自身が学習をすすんで取り組むことができるように必要感を感じることをするような授業展開をしていく。
6年	・大事なことを聞き逃したり、意図や意味を理解したりしながら聞くことに課題が見られる。また、それらの力は児童によって差があるため、話し合い活動を行う際の指導の見直しが必要である。 ・文章の読解力に差があったり、焦ってしまったりして勘違いしたりするケースも考えられるので、解き方の指導も必要である。	・話し合い活動では、話し合いの目的を明確にし、話の聞き方や話の仕方について指導をしてから行わせるようにする。 ・教材のよさや魅力を生かし、授業者自身が見通しをもって、学級の実態に合わせた授業を展開できるようにする。 ・書くことに抵抗がないように、日頃の振り返りから少しずつ難易度を調整して取り組むようにする。	・国語の学習だけでなく、他教科での話し合い活動でも、同じ指導を行う。 ・必要感や目的をもって「書く」活動を増やすことを心がけていく。年間を通して継続して行えるような楽しい活動にしていきたい。

〔様式3〕 指導方法の課題分析と具体的な授業改善案（社 会）

学年	指導方法の課題分析	具体的な授業改善案	東京都北区立王子小学校 補充・発展指導計画
3年	・地図から実際の場所をイメージすることに課題がある。 ・町探検やスーパーマーケット見学、消防署見学などの体験学習を計画している。体験を通して、児童の関心・意欲を高めているが、より充実した学習にするために事前・事後学習の時間数を確保する必要がある。	・目印になる建物を中心に他の建物がある位置やそれほどの方位にあるのか、といった活動をしていく。 ・校外学習の前に、何を調べるのか、どんな工夫をしているのか予想を立て、見る視点を明らかにする。また、見学後には、予想と比較したり、新たに気付いたりしたことを全体で共有し、学びを確かなものにしていく。	・方角や地図記号など、地図を読み取るのに必要な基本的な知識を繰り返し学習させ、定着を図る。 ・調べたことや考えたことを国語の単元と関連付けてまとめるなど、他教科と横断的な学習を計画していく。
4年	・デジタル教科書が使用できない状況から、資料を提示する際に見えづらいが多かった。 ・限られた指導計画の中で、児童が主体的に課題解決する時間を設けることが必要である。さらに、調べたことを共有する時間を設ける必要がある。	・資料提示をする際には、ICT機器を生かしたり、印刷したりすることで、資料から多くの気付きを引き出せるようにしていく。 ・単元冒頭で「探究的な課題」を設定し、児童に見通しをもたせる。各時間の「問い」を明確にしていく。	・調べたことや考えたことを他教科と関連付けてまとめられるようにする。 ・地図や資料の見方や使い方を系統的に指導していくとともに、地図や資料を活用できる場面を増やしていくように計画する。
5年	・地図や資料の読み取り、事実を確認する点に課題が見られる。 ・複数の資料を結び付けて、自分の考えを導き出すことを苦手としている。 ・用語の意味や目的の理解が不足している。	・単元の最初に事例が出てきたときに、地図帳を使って位置や土地利用などを確認する。 ・教科書の資料と本文を結び付けるようにさせることで、それぞれの資料からどのようなことが分かったかを、視覚的に明らかにする。	・学習で学んだことを自分たちの生活に生かせるように、他教科との関連を意識しながらカリキュラムをつくっていく。 ・自主学習などでほかの事例（例えば水道を学習したのであれば、電気やガスなど）についても調べる機会を設ける。
6年	・教科書や資料集だけでなく、ICT機器やゲストティーチャーを活用した発展的な学習を展開する必要がある。 ・ゲストティーチャーと連携した学習の方が印象に残っていることもあり、理解度の高さにつながった。	・教科書や資料集を使って、全員が同じ調べ学習をするだけではなく、児童一人一人がそれぞれ問いをもって調べ学習をすることで学びの本質につなげる。 ・単元の最後では、インプットしたことをアウトプットすることで学習の理解度を確かめる。	・ゲストティーチャーを活用し、興味・関心を更に高める。本物に触れる経験が理解度につながるので、そういう機会を多く設ける。 ・単元の最後にまとめたものを、他の学級と交流し、互いに高め合える活動に取り組む。

〔様式3〕

指導方法の課題分析と具体的な授業改善案（算 数）

東京都北区立王子小学校

学年	指導方法の課題分析	具体的な授業改善案	補充・発展指導計画
1年	- 数の概念の定着が十分でないため、具体物を数える経験を多く積ませる必要がある。 - 問題場面を式に表すことが難しいため、数の関係を半具体物を操作したり、図に表したりする活動を丁寧に扱う必要がある。 - 計算技能に個人差が大きい。ブロック操作をしながら計算したり、計算カードを活用したりして習熟を図る必要がある。	- 具体物を操作する活動を経験させ、数の感覚と量感を育てる。 - 問題場面の通りにブロックを操作し、加法・減法の場面を捉えさせる。具体物を抽象化するために、操作→図→式の段階を丁寧に扱う。 - 答えだけでなく、考え方を説明させる活動を増やす。 - 計算カードを活用して、計算技能の習熟を図る。	- 答えだけでなく、考え方を図や言葉で説明する時間を取り、論理的思考を伸ばす。様々な考え方を伝え合い、思考力を広げる。 - 他教科や、身近な日常活動の中にも数学的な要素を盛り込み、数に対する興味・関心や量感を高める。 - 基礎計算の習熟を図るために、きたコンのドリルを活用したり、家庭と連携して毎日計算カードに取り組んだりする。
2年	- 結果は概ね良好であるが、位取りや数を読み取る問題では基本の定着が必要である。 - 示された減法の式から、適切な問題を作る活動も取り入れていく必要がある。 - 計算処理能力を高めるためのドリル学習は、引き続き取り組んでいく。	- 普段の学習から問題場面をただ書き写すのではなく、場面を想像したり、式を決定する重要な言葉を見つけたりして、問題を理解する力を高めていく。問題提示の仕方を工夫し、自分たちで問題文を考える活動を取り入れる。 - 具体物を操作させ、量感を育てたり、計算の考え方を身に付けさせたりする。	- 考えたことを友達に説明する機会を増やし、考え方を理解させたり、深めたりする。 - 計算カードを使ったドリル学習と併用して、ICT教材にも取り組ませ、定着を図る。 - 他教科や日常生活の中でも算数を活用する場面をつくる。
3年	「かさ」の内容の基礎的な理解の定着が必要である。 - 全体ではよい結果だが、課題がある児童も多い。少人数指導を生かして、「知識・技能」を定着させられるように支援していく必要がある。 - 最後の問題で無解答の児童が多いことから、時間内に解けていないことが考えられる。問題を速く読み解く力や、時間を意識して問題に取り組む力を付ける指導が必要である。	- 具体物を取り入れることで、児童に問題場面をイメージしやすくさせる。また、体験的な活動を行い、量感を育てていく。 - 基礎的な計算力を高めるため、きたコンのドリル等で反復練習させる。 図、式、数直線等を用いて問題を解決している児童のノートを紹介し、多様な解決方法があることを示していく。	- 早くできる児童には、教科書の補充問題やきたコンでドリル等に取り組ませる。つまづきのある児童には、基礎的な問題をしっかり理解できるよう個別的な指導を行う。 - 自分の考えを友達に説明する時間を設け、算数的な思考力・表現力を育てていく。
4年	- 結果は良好であるが、意味を理解せずに技能だけ身に付いている傾向が見られる。筆算に出てくる数の意味を理解できていないことが顕著に表れていた。 - 計算だけでなく、意味を考えたり、説明したりする学習が少なかったと思われる。	- 計算ができるだけでなく、その意味を理解して説明する力まで身に付けさせたい。 - 自分の考えを書くことはできても、友達同士で説明する力が不足しているので、伝え合う時間を多く設けていく。	- 習熟度の差が大きいので、早く問題を解き終えた児童にはプリント等の補充問題や、きたコンでドリル等に取り組ませる。 - 日頃から友達同士で考えを説明し合う時間を多く設けることで、算数的な思考力・表現力を育てていく。
5年	- 全体的に数値が上回り、基礎的な考え方や自立解決はできることがわかる。理解したことをより、定着化させるために繰り返し練習問題を解いたり、相手に説明することで、主体的に学習する時間を確保したりする必要がある。 - 個人差も大きいので、少人数クラスでの学習を行い、習熟度に応じた指導を続け、個別指導が可能な場面を作る必要がある。	- 既習事項が身に付いているのかを確認するために、授業の初めや終わりに問題を解く時間をつくり、定着化を図る。 - 課題解決の際には、苦手な児童に対しても分かるような授業づくりをして、児童同士で理解を深める学び合いのある授業展開を行う。	- 習熟度に大きな差があるので、早くできる児童には教科書の補充問題をはじめ、きたコンを活用して問題に取り組ませる。 - 時間がかかる児童や理解度が低い児童には、問題を限定して徐々にできる量を増やしていくスモールステップの段階を作ったり、個人的な指導を行ったりするなどの指導を行う。
6年	- 用語が多く出てくる内容については、用語の意味をしっかりと理解させ、定着できるような指導を行う必要がある。 - 児童自身が正しい習熟度コースが選択できるようになるとよい。さらに、少人数が少人数指導できるようにしていけば、より個に合わせた進度で学習が進められることができる。 - 習熟度に応じた3つの資質・能力を高める指導を行う必要がある。	- 用語の意味を友達同士で説明し合う学習を行うことで、学習の定着を図る。 - 習熟度が低いクラスは、基本的な知識がしっかりと定着できるような授業を行い、高いクラスは発展的な学習を通して、力を高められる授業を行う。	- ICT機器を活用し、補充学習を行う。 - 中学校進学を見据えて、長期休業期間や6年の総まとめの学習では、児童それぞれが自分の苦手な内容を分かった上で学習に取り組ませる。

〔様式3〕

指導方法の課題分析と具体的な授業改善案（理 科）

東京都北区立王子小学校

学年	指導方法の課題分析	具体的な授業改善案	補充・発展指導計画
3年	・身近な事象から科学的に物事を捉え、実験の方法を考えたり、結果から考察したりする経験がほとんど無い ため、理科の学習の仕方を身に付けるよう、指導していく必要がある。	・問題→予想→計画→観察・実験→結果→考察→結論の授業の流れを明確にし、基礎を定着させる。 ・児童が問題を見つける場面では、不思議・なぜと思うことができるように、差異点や共通点を見出せる事象を提示する。	・定着を図るために単元の最後にプリントや教科書の問題に取り組みせ、理解を深めさせる。 ・NHK for Schoolなどの視聴覚教材を有効に活用し、興味関心を高めさせる。
4年	テストで正答率が低かった問題は、やや長文の問題文から、2つの磁石の極を読み取り、それを使って更に新しい磁石の極を判定するという内容であった。このように、2段階以上の思考を積み重ねるような学びの経験が少なかったと思われる。	空気や水、金属の性質や電流の働きについて、問題解決型の授業を展開し、子供たちが思考力を働かせながら知識を習得していくようにしていく。また、空気の性質で学んだことをもとに、水や金属の性質を予想していくなど、つながりのある授業を実践する。	単元の終わりに、教科書の「たしかめよう」の問題に取り組みさせる。とくに、「たしかめよう」の中の「考えよう」の問題は、思考力を問うもので、考えた理由を記述で答えさせるものとなっている。教師の解説や、児童同士の教え合いで思考力を高める。
5年	・前年度の反省から、メダカやインゲン豆の観察等、本物に触れる機会、時間を増やした。しかし、基本的な知識や技能の定着が不十分だった。個別に観察し、考える時間の確保の必要性がある。その知識を得て、生活と結び付ける時間の確保も必要だった。	・学習を生活に結び付けて考える力を養うために、（単元の最後）学習内容が生活のどのような場面で活用されているかを共有する時間を設け、自分の考えをまとめさせる。（書く、入力）また、予想を立てる等で、思考ツールや話し合いを用いて自分の考えをもたせる。	・個別に時間をかけて観察する時間を確保する。 ・単元の最後にも、学習したことがどのように生活と結び付いているか、どのような課題があるかなど、グループでの話し合い活動を行う。 ・単元の初め、考察、まとめの段階で動画を見させる。
6年	・問題→予想→実験→考察→結論といった問題解決型学習の考え方を定着させることに課題がある。 ・実験を実験したままで終わらず、準備段階からしっかり計画や実践するようにする。準備を児童自身に行わせる。 ・実験のまとめ、考察をしっかりと行い、授業で取り組む実験だけでなく、学習したことを生かした実験に取り組むなど、発展的な学習を行う。	・児童が問題を見つける場面では、児童の生活経験や知識とのズレを狙って事象を見せることを意識する。 ・実験を行う際は、必ず全員が予想もっている状態で臨むようにする。 ・考察では、問題や予想に一度立ち返って、何を予想したのか、何を調べるために実験をしたのか、結果では何が見えたかなどを丁寧に全体で整理する。	・ICT機器を活用して、実験の様子を記録させることで、事象を見逃した児童や、忘れてしまった児童が何度も見たり聞いたりできるようにする。